

株式会社神戸製鋼所 2026年度第1四半期決算説明会(2026年8月5日) 質疑要旨

1. 業績見通し(中東情勢影響を含む)

Q1: 下期の在庫評価影響を除く経常利益 665 億円を単純に2倍すると年間 1,300~1,400 億円程度となるが、この水準を26年度の実力利益と捉えて良いか。次年度へ一部持ち越される鉄鋼の価格改定の効果等を含め、実力利益の水準を確認したい。

A1: 実力利益は年間 1,350 億円程度と見ている。鉄鋼は中東影響に加え、石炭等の原料コスト上昇などから、第1四半期が利益の底となる想定。第2四半期以降は価格転嫁が進展し、下期にかけてメタルスプレッドが改善する見込み。一方、コスト上昇が先行し価格転嫁は後追いとなる構造のため、今年度中に全てを取り戻すことは難しい。

Q2: 各セグメントにおける主要な増減要因と前回(5月公表)からの変化について解説してほしい。

A2: 【素材系事業(アルミ板・素形材)】

アルミ板は、鉄鋼と同様にフォーミュラ契約による価格転嫁が中心だが、価格転嫁の期ズレによる影響が残る。素形材も同様の状況。

【機械系事業(機械・エンジニアリング・建設機械)】

四半期や上期・下期で差はあるが構成差や季節要因であり、年度全体では大きな変化はない。

【電力】

3号機の定期点検の延長影響を除けば大きな変化はない見立て。

全体として、素材系事業におけるコストアップと価格転嫁の期ズレが2026年度利益の下押し要因となっている。

Q3: 今回、中東情勢影響を各セグメントに反映したとのことだが、各セグメントの実力利益は中東影響によるコストアップを全て価格転嫁する前提か。あるいは中東影響を除いて算出しているのか。また、アルミ板や素形材は中東情勢影響によるコストアップ分は価格転嫁する仕組みには入っていないのではと思うが、転嫁できる余地はあるか。

A3: 2026年度中に全てではないが価格転嫁していく計画としているため、一過性を除く実力利益を算出する上で、中東情勢影響は一過性として実力利益の算出からは除いている。アルミ板や素形材については、アルミ地金の代替原料確保に伴うコスト上昇等、フォーミュラで完全にカバーされていない部分があるため価格交渉が必要となる。

Q4: 第1四半期中の中東情勢影響△55億円におけるセグメント別の内訳を教えてください。

A4: 内訳は鉄鋼△45億円、アルミ板△5億円、機械△5億円となる。

2. 素材系事業

➤ 鉄鋼アルミ(鉄鋼)

Q5: 価格転嫁について、上半期の自動車向け鋼材価格は数千円程度しか転嫁されていないという報道もあったが、フォーミュラ契約分と個別交渉分それぞれで、今後どのようにコストアップ分を転嫁していく方針か。下期以降の鋼材価格の前提についても解説いただきたい。

A5: 当社はひも付き比率が高いため、市況上昇局面での恩恵は受けにくい。自動車向けは大半がフォーミュラ化されているが、建築・土木や造船向けは個別交渉となる。またフォーミュラでカバーされるのは主原料や一部エネルギーコストが中心であり、輸送費等のフォーミュラ対象外のコスト上昇分は別途交渉が必要となる。主原料部分の転嫁は時間の問題と見ているが、それ以外の

部分についてはお客様の理解を得ながら交渉を進めていく方針。また、支給材価格は下期に上昇を見込む一方、主原料以外のコスト増加分についてはお客様に理解をいただきながら価格転嫁を進めていく。

Q6: 在庫評価影響を除くと上期△120 億円、下期 140 億円の経常利益となっているが、足元の実力収益水準はどの程度か。

A6: 上期と下期で状況が大きく異なるため、年間を通した実力評価は難しいが、今年度の実力利益は概ね 200 億円程度と見ている。

Q7: 下期利益 140 億円を年率換算すると 280 億円だが、実力利益が 200 億円というのは下期に一過性の利益要素があるということか。

A7: 下期にメタルスプレッドの改善が進むため、26 年度下期だけの実力損益は 200 億円程度(＝上期は 0 億円程度)とみており、26 年度下期の実力利益から 2027 年度を測るとなると、下期 200 億円の2倍で 400 億円程度の利益水準の見立てになる。

Q8: 鉄鋼事業で年間 400 億円という実力利益水準は近年あまり見られないが、何が改善要因か。

A8: 主な要因はメタルスプレッドの改善。26 年度下期計画にはコストダウンも含んでいるため、価格転嫁によるメタルスプレッド改善に加え、コストダウンの着実な実行が前提となる。

Q9: 鋼材の価格転嫁交渉の手応えやお客様の反応は。また、鋼材の販売数量を前回公表よりも 10 万トン上方修正しているが、第 2 四半期にかけて数量増を見込む背景について説明してほしい。

A9: 当初はお客様側も中東情勢の影響把握を優先されており、価格改定への理解を得るのは難しい状況だったが、足もとでは状況整理が進み、徐々に理解を得られつつある。価格改定については、一度に大幅な引き上げをお願いするのではなく、段階的に実施しながらお客様と交渉を進めている。今回の価格改訂は需給を背景としないため交渉のハードルは高い。一方で、こうしたコスト増は当社含む鉄鋼メーカーのみで吸収できるものではなく、サプライチェーン全体で分担していく必要があるとの認識であり、自動車メーカー、ゼネコン、造船メーカー等のお客様の理解が重要となる。価格転嫁の実現に向けて粘り強く交渉を継続していく。販売数量については、当初計画が保守的な前提であったことから、市況品の輸出等を中心に数量計画を見直したことが背景。

Q10: メタルスプレッド悪化について、中東情勢影響以外にどのようなコストアップ要因があるのか。

A10: 当社は市況品比率が高くなく、主原料価格が上昇しても即座に販売価格へは反映できず、早くても 3 か月、多くは 6 か月程度の時間差が生じるため、この時間差による影響が非常に大きい。数量増ではなくスプレッド改善に注力しているが中東影響以外のコストアップとしては、円安の影響を含む主原料価格上昇や金属類、副資材価格上昇などがある。

Q11: マージンが大幅に悪化する背景はコストアップが想定以上に早く、価格転嫁が追いついていないのか。あるいはお客様側の抵抗が想定以上に強く、転嫁が遅れているのか。

A11: 両面の要因がある。フォーミュラ化されている主原料部分は比較的転嫁可能と考えているが、フォーミュラでカバーされない部分は個別交渉が必要であり時間を要する。また、需給を背景とした値上げではないため、お客様の理解を得ながら進める必要があり、交渉の難易度は高い。必ず実現するつもりで活動を進めており、下期にかけて価格転嫁は着実に進展すると見込んでいる。

➤ 鉄鋼アルミ(アルミ板)

Q12: 第 2 四半期が在庫評価影響を除いても赤字見通しとなっているが、その要因は何か。また、下期の在庫評価影響を除いた経常利益を 5 億円へ下方修正しているが、その背景について説明して

ほしい。

A12: 第 2 四半期は中東影響によるエネルギー価格等のコストアップが先行するため赤字となる。コストアップ分の価格転嫁は進めるが、販売価格への転嫁にはタイムラグがあるため、26 年度では減益となる。

Q13: 在庫評価を除いた利益で、第 1 四半期は黒字、第 2 四半期が赤字となるのは中東影響によるコストアップが要因という理解で良いか。

A13: その通り。

3. 機械系事業

➤ 機械

Q14: 第 1 四半期が前年同期比で減益となっているが、その要因は何か。受注環境等、足もとの事業環境について解説いただきたい。

A14: 四半期ベースでは減益だが、通年での計画に変更はない。多くが既受注の案件であり納期も決まっている。受注残も 1 年半から 2 年先まであり、金額的に大きな変化はなく事業環境は堅調と認識している。

Q15: 受注高見通しを若干だが上方修正した背景は。特に中東情勢影響に伴う需要見通しを伺いたい。

A15: サービス含め受注は全く心配していない一方、足元のコストアップ分がありながらもその影響を自助努力で落としながら 400 億円の経常利益を確保する必要があるため、決して余裕のある状況ではない。

Q16: 機械事業における中東情勢影響を今回△5 億円のみ織り込んでいるがその範囲で収まる見通しか。

A16: 前回公表時点では中東向け案件のスケジュール遅延や海上物流の停滞による出荷遅れを懸念していたが、個別案件ごとにお客様と確認を進めた結果、物流面も含め概ね当初計画通り進められるだろうという認識となり、当初織り込んでいたリスクを縮小した。ただし中東情勢は依然として不透明であり、変化が生じる可能性は残っている。

➤ 建設機械

Q17: 第 1 四半期の経常利益は 9 億円だが、第 2 四半期以降にかけて増益を見込む背景について解説いただきたい。

A17: もともと売上・利益が下期偏重となる傾向があり、例年通りの動き。収益改善策やコストダウンを進めており引き続き努力する必要があるが、前回公表時点から業績見通しに特段大きな変化はない。

以 上

本資料は、金融商品取引法上のディスクロージャー資料ではなく、その情報の正確性、完全性を保証するものではありません。また、提示された予測等は説明会の時点で入手された情報に基づくものであり、不確定要素を含んでおります。従いまして、本資料のみに依拠して投資判断されますことはお控え下さいますようお願い致します。本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。